

## ペテロ第一4章1-11節「自分自身の武装」

### 1A 肉の欲望に対して 1-6

1B 罪からの断絶 1-2

2B 異邦人からの悪口 3-4

3B 申し開き 5-6

### 2A 万物の終わりに備えて 7-11

1B 心身の整え 7

2B 愛、親切、賜物 8-11

## 本文

ペテロの第一の手紙4章1-11節を見てみましょう。私たちの学び、3章において、「義のために苦しむ」ことについて見てきました。私たちはとかく、苦しめば自分が何か悪いことをしているからではないか？であるとか、神から怒られているのではないか？神の呪いなのでは？というように考えてしまいます。事実、神についてのことは、一般には「神を信じればよいことが起こる」と信じられているからです。けれども、ペテロは迫害の中にいるキリスト者たちに対して、「義のために苦しむことは良いことなのです。」と励ましています。そして善を行なうことに熱心でありなさいと勧めます。自分が罪を犯して苦しみを受けたら、それは何も荣誉なことではないけれども、善を行なうことで苦しみを受けたら荣誉なことです、ということです。また、もし説明を求められたら、優しく、慎み恐れて、正しい良心をもって弁明しなさいと勧めています。それが証しの機会となります。さらに、このように苦しみを受けている時には私たちの主、イエスご自身を見つめるように勧めました。主は肉体に苦しみを受けながら、霊においては生きたのです。

### 1A 肉の欲望に対して 1-6

そして4章1節から、「肉体において苦しみを受けるけれども、霊においては生かされる」という真理について、さらに説明していきます。

#### 1B 罪からの断絶 1-2

1 このように、キリストは肉体において苦しみを受けられたのですから、あなたがたも同じ心構えで自分自身を武装しなさい。肉体において苦しみを受けた人は、罪とのかかわりを断ちました。

今、お話ししましたように、ペテロは私たちに、義のために苦しむにあたってイエス様を見つめるようにいつも勧めています。3章18節で、「キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。」とありました。そしてペテロは今、キリストが受けられ

た肉体の苦しみに注目しています。キリスト者が、外側において苦しみを受けているということがあります。私たちキリスト者が、この地上を歩んでいるに当たって、必ず外からの圧迫と苦しみを受けています。しかし、そこで私たちが見つめるべきはキリストご自身です。「あなたがたも同じ心構え」でいなさいとペテロは勧めているのです。

そして、「自分自身を武装しなさい」と言っています。これはとても時宜にかなった勧めです。というのは、私たちは前回の主日礼拝において、ダニエルが霊の戦いの祈りを捧げたところを読んだばかりだからです。

ダニエルが、エレミヤの預言によってエルサレムが廃墟となるのは七十年であることを悟り、悔い改めと執り成しの祈りを捧げました。そして再建の命令が出てから、七十週が定められているという言葉を受け取りました。そして、クロス王の第三年、既にその王が元年に、エルサレムに帰還せよとユダヤ人に命じて、一部が帰還したのも関わらず、彼らは苦しみの中にいました。それでダニエルは、丸三週間、半分断食をして、悲しみを表しながら祈っていたのです。すると、御使いが来ました。そしてこう言ったのです。「10:12-14 あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき、終わりの日にあなたの民に起こることを悟らせるために来たのだ。」ダニエルが、祈りを捧げた第一日目に既に、その祈りは聞かれていたのに、それなのに墮落した天使であるペルシヤの君が、ユダの民に起こることを伝えるのを阻んだのだ、と言っています。第一日目に聞かれていたのに、実際に来たのは三週間後だったのです。このように、霊の戦いがあり、神の働きを阻む悪の勢力があるのだということを読んだのです。

そこで私たちは、自分たちは好むと好まざるに関わらず、霊の戦いの中に入れられており、絶えず、目を覚ましながらか、忍耐して、御霊によって聖徒たちのために祈るように命じられていることを学びました。そこでここにある、「自分自身を武装しなさい」ということはとても時宜にかなった言葉なのです。私たちは、霊的に自分自身を武装するように命じられているのです。

ペテロがこのことを話しているのは、とても意味があります。なぜなら、彼自身は霊的な武装にことごとく失敗してしまった過去があるからです。覚えていますね、彼はイエス様のように目を覚まして祈っていませんでした。それで全く備えができておらず、主を三度、知らないという罪を犯したのです。その時に、サタンがペテロをふるいにかけてとイエス様は言われます。「ルカ 22:31-32 シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」イエス様は、「誘惑に陥らないよう

に、目を覚まして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。(マタイ 26:41)」と言われたのに、ペテロはそれをせず、サタンの振りにかかったのです。しかし、イエス様が執り成しておられました。そして、彼はイエス様の「わたしを愛しますか？」という三回の問いかけによって、立ち直ることができました。この痛い経験があって、「自分自身を武装しなさい」と言っています。

そして、「肉体において苦しみを受けた人は、罪とのかかわりを断ちました。」と言っています。これが、キリスト者に与えられている霊的成長です。肉体における苦しみは、私たちに罪からの断絶、つまり聖めをもたらしてくれます。キリストの思いに自分が近づいていくことができるとうことです。ヤコブが、こう言ったことです。「ヤコブ 1:2-4 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」先に、ダニエルが満三週間祈って、その祈った結果、神の栄光に輝く、キリストご自身と思われる御使いに会いました。そして、自分は意識がなくなり、尊厳が損なわれそうになりました。けれども、「愛されている者よ、ダニエル。」という言葉を受けたのです。こうやって、試練や苦しみを受けることによって、罪から離れ、ますます聖められることとなります。

2 こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。

ペテロは、私たちにこの地上での歩みを正しい見方で見るようにさせてくれています。「地上の残された時」であります。私たちは絶えず、その終わりの日を見なければいけません。「1:17 人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごしなさい。」「2:11 旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲から遠ざかりなさい。」この地上での生活は、いつまでも続くのではなく、残された、数えることのできる時であります。

この見方があるからこそ、二つのことができます。「人間の欲望のためではなく」が一つですね、そして、「神のみこころのために過ごすようになる」が二つ目です。私たちは、自分の肉の欲が刺激される世に生きています。何かがあれば、すぐに罪に陥ってしまわせるような誘惑が数多くあります。そして、さらに霊の戦いは複雑です。「良いもの」とされていることで思い煩わせることも、悪魔の策略です。マリヤが主の言葉を聞いていたのに対して、主に仕えるつもりで、心が奪われて主ご自身をなじるという過ちをマルタが、犯しました。良いものであっても、主ご自身よりも大切にするのであれば、それは自分の肉の欲望を満たしていると言ってよいでしょう。そして、「神のみこころのために過ごすようになる」のですが、主が命じておられることが何であるかが、自分自身を霊的に武装することによって、なおのこと見えてきます。イエス様がゲッセマネの園で祈られて、そ

れでご自分の願いを捨てて、父の願われていることを選び取ることができました。

## 2B 異邦人からの悪口 3-4

3 あなたがたは、異邦人たちがしたいと思っていることを行ない、好色、情欲、醉酒、遊興、宴会騒ぎ、忌むべき偶像礼拝などにふけたものですが、それは過ぎ去った時で、もう十分です。

ペテロは、彼らが過去に行っていたことを取り上げています。「異邦人たちがしたいと思っていることを行ない」と言っています。異邦人であれば、「これが普通、みんなやっていくことでしょう。」ということをやっていたことでしょう。そしてユダヤ人であれば、そのような異邦人のやり方に影響を受けて堕落していた人々がいたかもしれません。それは何かと言いますと、「好色、情欲、醉酒、遊興、宴会騒ぎ、忌むべき偶像礼拝」であります。ペテロが、小アジアの教会に出していることを思い出してください。パウロも、ガラテヤ人への手紙、エペソへの手紙、コロサイ人への手紙で、やはり同じ内容を取り上げていました。私たちは黙示録の七つの教会へのイエス様の言葉を見た時に、その退廃ぶりを知りました。

エペソの町について、こう説明しました。「ローマ帝国の他の大都市にもある、大きな問題がキリスト者にはありました。非常に異教的だ、ということです。アルテミスという豊穡の女神が祀られている、「アルテミス神殿」は、世界の七不思議の中に入られています。数多くの柱があり、そして奥にアルテミスが祀られていますが、その偶像たるや、胸のあたりに数多くの乳房がぶらさがっている、非常に卑猥、奇妙なものであります。けれども、アルテミス信仰は根強い人気があり、参拝客は絶えませんでした。…そこは性的な乱れが当たり前のようには起こっていました。そこにいる巫女、女祭司は事実上の売春婦でした。そして、アルテミスのお祭りが例年行なわれていましたが、その時は乱痴気騒ぎが起こります。そしてそのそばには遊郭があります。売春宿ですが、それが大通りの中心部のところに堂々と立っています。」そして、ペルガモの町については、こう書いています。「ぶどう酒の神、ディオニュソスの神殿があります。これは、簡単にいうと「羽目を外したい」という時に行くところです。オカルト的礼拝でありました。強い麻薬を混ぜたぶどう酒によって、参加者たちは恍惚状態に陥ります。そして、酩酊し、錯乱していきました。乱痴気騒ぎであります。時に、人の命まで取られてしまう程であったと言われてしています。」このように、性的な堕落、遊興、そして忌まわしい偶像礼拝が普通だったのです。

けれども、そうしたものは過ぎ去ったのだとペテロは励ましています。これらは口にするのも恥ずかしいことですが、しかし今はそうではないのです。パウロが、同じようにコリントにいるクリスチャンを励ましました。「1コリント 6:11 あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」私たちは、御霊によって、主に御名によって洗われました。それだけでなく、聖なる者とされ、そして義と認められたのです。

4 彼らは、あなたがたが自分たちといっしょに度を過ぎた放蕩に走らないので不思議に思い、また悪口を言います。

ここからが、ペテロの手紙の強調点です。自分が迫害を受けるのは、なぜか？それは、自分自身がキリストにあって新しくされたからです。自分が変えられたことを周りの人々は不思議に思いますが、そして悪口を言います。私たちは、恐れてしまいます。自分が変わった事によって、今まで付き合い合ってきた人たちがどう自分を思うのか？ということが恐れるのです。けれども、キリストによって変えられた生活というのは、隠しようがありません。そして、もし自分に害を加えるようなことがあれば、主が裁いてくださるという信仰があります。

### 3B 申し開き 5-6

5 彼らは、生きている人々をも死んだ人々をも、すぐにもさばこうとしている方に対し、申し開きをしなければなりません。

私たちが、迫害や圧迫を受けるのであれば、そのことを主が正しく裁いてくださいます。「申し開きをしなければなりません」と言っています。この信仰はとても大事です、主ご自身が十字架に付けられる時に、父なる神に迫害者への裁きを任せられました。「2:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」私たちは、云わば霊的な”泣き寝入り”をしてはいけません。私たちは、迫害や反対に対して何も訴えない、ただ我慢して耐え忍ぶことを教えられています。しかし、時々、マスコミでも何か被害を受けた人が、公に訴えている人の姿がありますね。その時に、公に出て来るなどはしたくない、という教育を私たちは幼い時から受けています。だから、泣き寝入りするのです。しかし、キリスト者はそのまま、裁きを主に訴えることができます。主にお任せするのです。主は、必ず報いてくださいます。

そして、申し開きするのが、「生きている人々をも死んだ人々をも」と言っている点が興味深いです。主は、生きている者たちを裁かれます。この地上に大きな患難をもたらします。神の怒りが地上に下ります。そして死んだ者も、キリストの千年の統治の後に甦らせません。死んでいても甦り、白い大きな裁きの座の前で、行ないの書にしたがって裁かれます。そして、火の池に投げ込まれるのです。ここでペテロは、「すぐにもさばこうとしている」と、主の裁きの速やかさを強調しています。ですから、信者は励ましを受けるのです。自分に、今、迫害している人々がいても、その人は裁かれるし、何も裁かれないで死んでいった人がいても、彼らが裁きを免れることはなく、しかも、その裁きは遅れることはないのだ、ということです。

6 というのは、死んだ人々にも福音が宣べ伝えられていたのですが、それはその人々が肉体においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神によって生きるためでした。

ここは理解するのが難しい箇所ですが、説明いたします。ここ「死んだ人々」というのは、信仰

をもって死んだ人々のことです。福音が宣べ伝えられたのは、彼らが生きている時であり、そして今、もう死んでいるということです。そしてその人たちの中でも、ペテロは、「肉体においては人間としてさばきを受ける」と言っています。つまり、有罪人のように裁かれて、それで殉教した人々のことを指しているのでしょう。キリストがそうでありました、肉体において人間から裁きを受けられましたが、霊においては父なる神にあって生きておられましたね。ここで、キリストにつく者たちは人間から裁きを受けてそれで死んだとしても、霊においては神によって生きることになるのだ、ということです。ここで強調されているのは、「肉体に対する苦しみによって、罪から離れ、神の御心を行ない、そして霊が生かされる。」という流れであります。

## **2A 万物の終わりに備えて 7-11**

こうやって、肉体に対する苦しみ、試練や迫害に対して、自分自身を武装しなければいけないことを学びました。次は、「万物の終わりに備える」ことについて学びます。

### **1B 心身の整え 7**

7 万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。

ペテロの手紙には、何度も終わりの時が近いことを書いています。キリストの現れが近いこと、そして今読んだように、神のさばきが今すぐにでも来るということを見ました。そしてここでは、「2 ペテロ 3:11-13 万物の終わりが近づきました」とあります。ペテロの手紙第二の中に、その詳しいことが書かれています。「このように、これらのものはみな、くずれ落ちるものだとすれば、あなたがたは、どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょうか。そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」天における万象が全て焼け溶けてしまいます。けれども、それは消滅を意味するのではなく、新しい天、新しい地の再創造であります。黙示録 21 章 1 節に、このことが書かれています。「また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。」

そしてここで大事なのは、「どれほど聖い生き方をする敬虔な人でなければならないことでしょうか」ということです。また、「正義の住む新しい天と新しい地」であります。世の有様は過ぎ去るのに、その時に世の事柄に関わっているとしたら、自分も共に滅んでしまうこととなります。「この曲がった時代から救われなさい(使徒 2:40)」とペテロは、五旬節の時に悔い改めたユダヤ人たちに対して言いましたが、それはこの時代が過ぎ去るからです。彼らの時代には紀元 70 年にエルサレム破壊がありました。そして私たちの時代には、万物の破壊があります。使徒ヨハネも言いました。「1ヨハネ 2:17 世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。」預言者エレミヤのことを思います。バビロンによって神がエルサレムの住民に怒りを示さ

れた時に、エレミヤは迫害を受け、穴の中に入れられて死にそうになりましたが、それでも救われました。しかし他の者たち、王の家来はことごとく剣で倒れました。そして王自身は、青銅のかせにはめられて、息子たちを目の前で虐殺され、目を抉り出され、バビロンに捕え移されていったのです。ゆえに、エレミヤは迫害を受けましたが、しかし患難から救い出されたのです。私たちは、神の怒りから救われますし、世が減びるところからも救われます。

しかし、万物の終わりにおいては、「祈り」が必要です。これが冒頭でお話したことです、霊の戦いの祈りがあります。自分自身を武装するにあたって、祈りが必要であります。そして、その祈りによって、「心を整え身を慎みなさい」とあります。心を整えることは、「思慮深くふるまう」という意味です。心を確かにする、とも訳せます。今の生活、現実の生活の中で、切迫した終わりの時を待つことを意味します。終わりの日において、神の御心を行えるような心、その健全な思いです。それから、「身を慎む」ことについては、節制することです。祈りのために、したいこと、欲していることも自制し、祈りに専念することです。自分のしていることで、祈りの時間が少なくなっていることがないでしょうか？ダニエルのように、心を定めて、顔を神に向けて祈るということが必要です。パウロとローマ総督ペリクスのことですが、「使徒 24:25 しかし、パウロが正義と節制とやがて来る審判とを論じたので、ペリクスは恐れを感じ、「今は帰ってよい。おりを見て、また呼び出そう。」と言った。」ペリクスは、妻ドルシラを他の男から奪い取っていました。それもあって、恐れを感じたのです。けれども、正義と節制と、やがて来る審判です。

## 2B 愛、親切、賜物 8-11

そして、祈りによって心を整え、身を慎みつつ、私たちが神の家が建てられていくことに専念します。8 節から 11 節までがその箇所です。既に 2 章でペテロは、「あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。(5 節)」と教えていました。終わりの日の預言に熱心な人たちの中には、教会生活がきちんと送れていない人たちがいます。万物の終わりが近いということと、互いに愛し合う兄弟たちの交わりの中に入るということは、一対で行われることなのです。

8 何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです。

これが使徒ペテロの教えだけでなく、他の使徒たちの教えでもありました。例えばパウロは、コロサイの教会への手紙でこう書きました。「コロサイ 3:13-14 互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」ペテロは、何よりもまず、と言い、パウロも、「これらすべての上に」と言っていますね。イエスご自身が、命令として出されたのが互いに愛し合いなさいでありましたから最優先事項であります。互いに熱心に愛し合います。

そして興味深いのは、「愛は多くの罪をおおう」とありますね。神の御心は罪を赦されることです。旧約の罪の赦しの概念は、「罪を覆う」であります。ユダヤ人の使徒であるペテロは、ユダヤ的な表現で罪の赦しを話しています。私たちがいかに、罪を赦すという心が必要であることを教えています。時に、行なわれている罪は明らかにされなければいけません。悔い改めていない人について、初めは二人、三人の証人、それでも悔い改めないのなら教会全体で裁きます。これは、とても苦しいこと、辛いことです。けれども、悔い改めたのであれば罪は赦す、過ぎ去らせる、あるいは覆うことが必要です。しばしば、「不正を暴かなければいけない」という正義感に燃えて、すぐに表に出したがる人がいます。けれども、愛があればその罪を悲しみ、その人が立ち直るのを願って祈るで忙しいですから、そんな暴くなんていう暇はないでしょう。

#### 9 つぶやかない、互いに親切にもてなし合いなさい。

この勧めは、私たちキリスト者が互いに咬いてしまうことが背景にあります。誰かが困難に会っています。例えば、誰かが牢屋に入れられたら、本人のところに面会に行くこともあるでしょう、そして残された家族を助けに行くこともあるでしょう。また、迫害によって礼拝の場所を変えなければいけないこともあるかもしれません。いろいろ、不便なこと、負担になること、そしてちょっとした意思伝達の行き違いで、誤解を与えるようなこともあるでしょう。その時には、「つぶやかない」ということが大切です。そしてしてはいけないという命令だけでなく、しなさいという命令があります。「互いに親切にもてなし合いなさい」であります。互いにキリストにあって結ばれた者です。神の家族です。ですから、互いにもてなすことはキリスト者としての倫理であり、生活様式であります。私たちは愛し合い、そして互いに親切にしてもてなし合います。

10 それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。11 語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。栄光と支配が世々限りなくキリストにありますように。アーメン。

ペテロは、パウロと同じように教会における神の恵みの賜物の賦与を教えてください。賜物をそれぞれが用いるということは、神からの命令であり、御心です。教会として集まる時に、自分がそこで用意したものを受けに行くということであれば、それは誤った教会の見方です。ここに、「それぞれが賜物を受けている」とあります。誰一人、キリストの体の中で器官でないものはないのです。それぞれが賜物を受けているのですから、それを用いる必要があります。今の教会では、「一部の奉仕者が奉仕をするのだ。そして他の人々は参加するのだ。」という区別があります。このようになってしまう現実はあるでしょう。けれども、聖書的な手本は全ての人たちが関わることです。

次に、「神のさまざまな恵みの良い管理者」とあります。神の恵みによって賜物を用います。神のさまざまな恵みとありますが、神の恵みはいろいろな形で現れます。私たちはしばしば、秩序を重んじるあまりに、自分は控えていなければいけないと思っています。一部の人たちだけが、賜物を用いようとしています。けれどもここで、ペテロは、恵みはいろいろあるのだと強調し、多様性があるのだよということを話しています。全ての人が手ではなく、全ての人が足ではありません。ですから、神から恵みを与えられた中で、賜物が与えられています。自分が何ができるのか？ではなく、罪の中に死んでいたのに、キリストにあってよみがえったという救いの恵みと同じ恵みで、賜物を用いるのです。

そして大事なのが、「良い管理者」と書いてあることです。パウロも、「管理者には、忠実であることが要求されます。(1コリント 4:2)」と言いました。まず、私たちには神からの召しが必要です。「主から何が命じられているか？」ということ、主から聞かなければいけません。このことを行なっていることが大切です。自分でこうすればよい、ああすればよい、という提案が神に対して生まれます。そういった自分の考えは、神の前には一切不要です。神こそが最も良いアイデアを持っておられます。この方が何を言われているのかを聞きます。そして、人々はいろいろ不平を鳴らします。あるいは、何も自分の奉仕に対して応答しないということもあります。しかし、自分が誰に仕えているのか？を思い出す必要があります。神ご自身に仕えています。主が命じられることに忠実なのです。時にそれは、何もしないことかもしれません。主が何も命じていないのに、「私はこれこれを行ないます。」ということは、滑稽なことです。無視されてしまいます。

そして、「語る人があれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕する人があれば、神が豊かに備えてくださる力によって、それにふさわしく奉仕しなさい。」と教えています。これは、自分がどの位置に付いているとか、そういった立場や地位のことではなく、行なっていることそのものが大事であることを強調している表現です。誰が語れて、誰が奉仕するのか、ということではなく、語る力、奉仕の力は、すでに与えられているという前提です。それらを使いなさいということです。ここで、短く、奉仕に二つ種類があることを教えていますね。言葉に関わる奉仕がありますね、そして行ないに関わる奉仕です。預言であるとか、知恵や知識、信仰などは語ることについての奉仕です。そして奉仕や施し、憐れみなどは、行なう事についての行使です。約束を覚えましょう、「神が豊かに備えてくださる力」があります。

そして今回は、「燃えさかる試練」について見ていきます。そこにある栄光があります。そして、その後にある神の裁きがあります。イエス様が迫害される者は幸いである、大いに喜びなさいと言われた言葉。それから、人の子が来られる時に全ての主と言う者が、御国に入れるわけではないという言葉があります。